

# 兵庫県産のヒラベについて(その2)

麓 禎 康, 中 井 昊 三, 柴 田 茂

岡 田 齊, 原 田 一 彦

## はじめに

昨年, われわれは兵庫県産のヒラベの2, 3の点について報告したが, そののち得たところによって, 内海産のビワマス(アマゴ)および加古川のシラメ(銀毛アマゴ)について速報し, 前報<sup>1)</sup>の知見を補足する。

### 1. 播磨灘のビワマス(アマゴ)について

兵庫県では, 昭和43年3月から5月の間, ニジマスの海洋放流の効果を判定するため, 調査を行なった。そのため, 県水産課と水産試験場に, 内海で漁獲されたニジマスだけでなく, それ以外のマスの漁獲が報告され, 標本が提出された。40例の内, 斑紋からビワマス(*Onchorhynchus rhodurus*)と判定される6例に, 個人的通報(岩見漁業協同組合)1例を加えて, 漁獲の時期・場所・方法をまとめたものが第1表である。

第1表 昭和43年報告された播磨灘産ビワマス(アマゴ)

漁獲月日	体長 cm	体重 g	漁場	漁法	報告した漁業協同 組合名
3月15日	22.0	220	曾根沖	つぼ網	高砂市, 伊保
" 18日	20.0	180	"	"	"
" "	21.5	127	未詳	"	"
4月13日	34.5	700	"	"	五色町, 鳥飼
" 26日	38.0	140	"	"	"
5月7日	37.0*	720	"	"	御津町, 岩見
5~3月	18.9	115	"	不明	西淡町, 湊

\*.....全長, 売価¥800

県の水産課はニジマスの報告を求めたので, ビワマスには報告漏れがあることは, 岩見から直接通報された例で明らかで, 例年漁獲のある赤穂から報告がないのは, 識別に自信があって, 意識的に報告を省いたものである。(播州ではニジマスの漁獲はなかった。)

第1表に漁場の記入のないものは, 報告した漁業協同組合名から推定されたい。漁法が, 不明の1例を除いて, 小型定置のつぼ網に限られていることは, 漁獲されたビワマスがきわめて岸近くを回遊していたことを示す。しかし, 沖合で操業される漁法では, 漁獲できないかも知れないので, これだけで, ビワマスが沖へ出ない

とはいえない。

前報<sup>1)</sup>では, ビワマスの漁獲は, 赤穂近海に限られたから, 出水などによる偶然とも考えられるが, 本年は播磨だけでなく, 淡路の漁家も漁獲しているので, ビワマスの播磨灘への降海は, 多数ではないにしても, 正常な回遊と見てよいであろう。

前報起草のとき見落とした資料<sup>2)</sup>によると, 昭和41年に淡路では, 西浦だけでなく, 東浦・南浦でもビワマスは漁獲されており, 播磨の諸河川だけでなく, 紀ノ川や吉野川(四国)からも降海するのであろう。

アマゴの回遊範囲を淡水の影響するところとする, 天子山人の旧説<sup>3)</sup>(新説:私信で, アマゴは偶然以外に海中へ出ないという)は, アマゴとヤマメ(*O. masou*)の分布域に照らし, 有力な仮説であると思われる。

ただ, 千種町や青垣町で, マスの産卵(方言:する, ほうける)について聞いたことが無いのは, 筆者には不可解である。まだ標本を得ないが, ビワマスの回帰を思わせる話を聞くので, 播磨灘のビワマス(アマゴ)は, アマゴから出るが, 母川へ回帰できずに死滅すると結論することは, 今は避けたい。

### 2. 佐治川のシラメ(銀毛アマゴ)

シラメの定義<sup>4)</sup>は必ずしも明瞭でないが, ここでは, 全体がグアノン結晶で銀白色になった, 換言すれば, 銀毛化したアマゴをシラメとする。

昭和43年1月, われわれは, 東大の人々に協力して採血<sup>5)</sup>した29尾のアマゴの中から, 4尾のシラメを発見した。その形態は第2表の通りである。

第2表 青垣町の蓄養池のシラメ

標本番号	全長 cm	体重 g	赤色点数 (左側)
No. 3	17.8	39	13
No.23	16.9	35	28
No.25*	19.3	53	26
No.29	16.6	26	34

\* parr marks が淡く見えた。

第2表の標本No.25以外の3尾も鱗の下に parr marks が認められた。鱗の脱落は表以外の標本より容易なよう

註 γ-ヘモグロビン電気泳動の結果は複雑であったので, 標本を追加して, 検討を進める予定である。

に思われた。

これらのアマゴは、氷上郡青垣町の足立昭四郎氏が、昭和41年に佐治川支流で採集し、蓄養していたものから寄贈されたものである。標本の抽出には、赤色点数は幾分考慮したが、銀毛化は意識しなかった。シラメ以外のものは、全長11.3~17.6cm、体重10~41g、赤色点は左側で8~62であった。

シラメには小型はなく、赤色点数では大差は無いといえよう。標本の鱗紋は全部ピワマス型、経歴から、少なくとも満2才以上と推定されるが、蓄養のためか、検鱗による年齢査定に成功しなかった。

これとは別に、開田は昭和42年11月青垣町大名草南方の播州坂方面の谷口で、次いで昭和43年5月にその上流俗称広谷で、採集したそれぞれ数尾のアマゴのうちからシラメ化したもの各1尾を発見した。2尾とも被鱗体長20.0cm、parr marksは不明瞭ながら認められ、銀白色の鱗は甚だ脱落し易かった。

これによって、シラメ化は、蓄養という人為的環境によって発生した現象でなく、佐治川のアマゴに散発する遺伝的性質であると考えられる。

シラメあるいはシマメに相当する名称が岐阜県以外のアマゴの産地にない(木村清朗氏からの私信によると、岡山県美作地方に別の方言が存在するらしい。)ので、アマゴの銀毛化を非常に特異な現象と考えている人<sup>5)</sup>もあるようである。しかし、天子山人<sup>3)</sup>は市川・揖保川で採集しており、シラメは、さほど多くはない(アマゴが全体として多くない。)が、また、甚だしく稀なものでもないらしい。ただ、釣上げると、多くは鱗は脱落してparr marksが見えてくるので、釣人の注意を引かず、普通のアマゴ(ヒラベ)と区別する名称を特に持たないのであろう。

サクラマス(*O. masou*)の銀毛化(ギンケヤマベ)は降海の前兆とされるが、シラメと降海との関係は、それほど密接とは考え難い。佐治川の水源地帯の谷川は、すべて、平水時には扇状地で伏流となり、地表水が佐治川本流と連続するのは、大量の降水があったときに限られる。

このように、青垣町の谷川に住むアマゴが佐治川の本流に出る機会は限られており、その合流する加古川は、

バルブ・染色排水・下水による汚染が甚だしいが、加古川中流の斗竜灘でとれたアマゴが、井上氏<sup>6)</sup>によって報告された。これは、1月に死んだときには、parr marksの明瞭な普通のアマゴであったが、5月に漁獲されたときには、完全なシラメであった。加古川水系では、加美町の杉原谷にもアマゴが住むので、斗竜灘のシラメと佐治川のシラメを直結することはできない。しかし、シラメには、中流まで回遊するものもあるが、青垣町では地形上、谷川に定住するものが多いと考えてよいであろう。

山代昭三氏からの私信によると、北海道のサクラマスは、降海すると1~2ヶ月で、parr marksが消失するとのことであるが、これをピワマスにも適用して、ここでは、井上氏のアマゴを、ピワマスではなく、シラメであるとした。兵庫県生物学界の大先輩大上氏<sup>7)</sup>が何をマスとしたか、今は明らかにする方法がない。

斗竜灘のアユやなでは、毎漁期3~4尾のヒラベまたはマスがとれると、滝野漁業協同組合長の話であるが、これらの漁獲物が、普通のアマゴか、シラメか、あるいはピワマスであるか明らかでない。この確認とともに県下で水質の最も良い千種川を調査すれば、アマゴ・シラメ・ピワマスの関係を解く手がかりが得られるかと考える。それは、今西氏の仮説<sup>4)</sup>か、加藤氏の岐阜県木曾三川における見解<sup>8)</sup>を確認する結果になり、シラメが独立の種となることはないであろう。

#### 引用文献

- 1) 麓 祐康, 他: 本誌5, (5) 369 (昭和43年)
- 2) 兵庫県水産課: 栽培漁業3, (3, 4) 32 (昭和41年)
- 3) 天子山人: 山本素石編: 近畿を中心とする溪流の釣 21 (昭和42年) 釣の友社
- 4) 今西錦司: 釣の友1968(4), 24 (昭和43年)
- 5) 水野信彦: 淡水生物11, (1) 1 (昭和41年)
- 6) 井上喜平治: 兵庫県内水面漁連月報(42) 6 (昭和43年)
- 7) 大上宇一: 動物学雑誌14, 341 (明治34年)
- 8) 加藤文男: 木曾三川河口資源調査中間報告 (昭和43年)

追記 資料を提供された兵庫県水産課普及係の各位に感謝します。なお、五色町烏飼で漁獲された2例については再調査して下さったが、標本が現存せず、再確認できなかった。